

ずいそう

## 「集団生活のススメ」

増田 憲二



大阪府の橋本知事が府の中堅幹部の自衛隊体験入隊を提案して話題になったが、最近、新入社員研修などに体験入隊を活用する企業が増え、体験者は年間2万人を超えるという。私は長年自衛隊に勤務し、新入社員の体験入隊も担任したことがあるが、鍛えるというより、規則正しい集団生活を体験し、礼儀正しさなどを身につけてもらう程度で、簡単に体力や根性などがつくとは思わない。しかし、集団生活の経験のない新入社員にとっては、一緒に寝起きして、訓練で互いに声を出し励まし合うだけでも、ある種の新鮮な刺激があるようだ。自衛隊の教育には、学校教育とは違った特徴がある。自衛隊と学校では目的も置かれている状況も異なり、一概には比較できないが、その特徴は、集団生活を通じて、徹底して「枠にはめる」「型にはめる」ということに尽きる。そして、その指導に、ただ「やれ!」という絶対的な強制力があることだ。新入隊員は、最初の教育で、自我のままに許されていた親の元から切り離され、自衛隊という組織の枠の中で、自我が通用しないこともあることを悟られる。いわゆる落ちこぼれや不良少年でも丸坊主にされて3ヶ月の教育を受けると、これまで手を焼いてきた親や高校の先生が驚くほど見事に变身する。

私も防衛大学校において初めて集団生活を経験した。全寮制の学生宿舎では、各学年2人ずつ8名の学生が一つの部屋で生活する。起床から就寝まで全ての行動が時間で厳しく統制される。まず、朝6時、起床ラッパで起こされ、2~3分でシーツと毛布をたたみ、真冬でも上半身裸で舎前に集合して点呼を受ける。その後、体操、掃除、食事となる。授業開始は8時、朝礼後、隊列を組んで学生宿舎から教場に向かう。ちなみに、授業中校内では、必ず隊列を組んで移動しなければならない。授業終了後は、クラブ活動で鍛えられる。レベルの差はあれ、練習は一般の大学と同じだが、練習終了から自習開始までが凄まじい時間帯となる。用具の片付け、入浴、食事を済ませて約1時間で宿舎に戻る。移動は全て駆け足、ゆっくり食事を味わうことなどない。どうしても「早食い」となる。7時から10時までは自習時間、本を読んだり、手紙を書いたり、何をしてもいいが、机についていなければならな

い。消灯は10時、眠くなくても強制的に寝かされる。その上、いつも朝までぐっすり眠れるというわけにはいかない。不意急襲的に非常呼集訓練が開始され、夜中にたたき起こされることもある。厳しい門限があり、1年生の時は外泊もできないが、週末の外出が唯一の楽しみであった。学生宿舎では、洗濯、プレス、裁縫等は全て自分でやり、服装容儀について厳しい指導がある。特に、外出時には服装点検があり、ズボンのプレス、靴の手入れ、頭髪、爪、髭剃りまでチェックされ、合格しないと外出許可にならない。また、全ての物は直角・水平に整理整頓することが要求される。時々点検があり、手抜きは許されず、例えば毛布のたたみ方が悪いと、シーツや毛布はおろかマットごと部屋の窓から放り出されることもあった。学生宿舎には、上下級生には厳然たる身分秩序があり、上級生には必ず敬礼し、敬語は勿論のこと直立不動の姿勢で話さなければならない。上級生の指導は絶対であり、理不尽なことで服従を強要されることもあった。

学生宿舎の生活は、いつ、上級生に怒鳴られるか分からないといった緊張感のなか、個人が持てる時間や空間が厳しく制約され、自由気儘な学生生活を送る高校の同級生が羨ましかった。しかし、いま振り返ってみると、この4年間の集団生活は、人に揉まれ、人に鍛えられる、まさに「人間修養の場」であり、そこでクラブ活動による鍛錬と相まって、心身を鍛え、自我をコントロールすることを学ぶことができたと思う。集団生活を通じた教育には、苦勞を分かち合う仲間がいて、「ダメなものはダメ」とする強制力がある。我々団塊の世代が子供の頃、先生には威厳がありカミナリ親父もいて、学校や家庭でちゃんと枠にはめられ、近所のおじさんに叱られながら大人になっていったが、最近では、それもあまり期待できない。子供たちには、社会に出る前に、どんな組織でも構わないが、規律ある集団生活を一度は経験させたいものだ。最後に、防衛大学校の学生宿舎はまるで刑務所みたいと誤解される読者もおられると思うので、母校の名誉のため、学生宿舎の管理は自主自立の精神の下に全て学生の手で行われ、暴力やイジメの類は全く無かったことを付言しておきたい。